

映画以前の視覚文化の諸相

——日清戦争期の京都における幻燈と見世物——

上 田 学

1. はじめに

近年、スクリーンプラクティスの観点から、日本映画史の起点を映画輸入時点にもとめず、映画以前の視覚文化と、初期映画との連続性について論じた研究への関心が高まっている¹⁾。そして、このような視座から、視覚文化のなかでも、とりわけ幻燈に関する研究が蓄積をみせている²⁾。本稿は、こうした研究動向を踏まえ、従来は明らかにされてこなかった、映画輸入以前の日清戦争期における、京都の幻燈上映と見世物興行の状況を論じることを目的としている。

京都を地域的な対象としたことには、二つの理由がある。第一に、京都は1897(明治30)年にシネマトグラフの初輸入をおこなった稲畑勝太郎が、試写というかたちで日本最初の上映会をおこなった都市であったという点である。さらにその後、多くの撮影所が建設され、長らく東京とともに日本映画製作の中心地として発展していったことを考えあわせれば、20世紀の映画史に果たした都市としての重要性は疑いないものだろう。そのような京都の映画前史を明らかにしていくことは、なぜその都市で映画産業が確立していったのかを考察するための基礎的な研究になると考えられる。

第二に、映画前史に関する先行研究の地域的な偏りがある。日本の映画前史について、これまでの先行研究は、多くが東京の事例を対象として分析をおこなってきた。これは、映画前史の視覚文化である写し絵の興行をおこなっていた池田都楽や結城孫三郎、あるいは幻燈器械および種板を製作していた鶴淵幻燈店や吉澤商店(丸川商店)の所在地が東京であり、比較的充実した現存資料に恵まれ、その実態が明らかにされやすかったことが、大きく影響していると考えられる³⁾。しかし、このような地域的な偏りは、かならずしも当時の実状を反映していない。たとえば、写し絵と同種の視覚文化である錦絵影は、19世紀末において、東京よりも大阪のほうが盛んに興行されており、常設館すら存在していた⁴⁾。京都の事例を明らかにすることは、従来の映画前史に関する研究の地域的な偏りを是正することにつながると考えられる。

また映画前史の視覚文化として、これまでの先行研究の中心であった幻燈に加え、見世物興行についても論じていくのは、それが初期映画の興行形態と連続性をもっていたからである。たとえば、日本最初の映画館である東京浅草の電気館は、見世物小屋を改装して開館し、その興行形態を引き継いでいる⁵⁾。電気館に限らず、当時の日本における映画興行の中心地であった、浅草公園六区に立地していた映画館の大半が、見世物小屋を改装して開館しており、興行形態における、その連続性は明らかである。京都の場合、見世物のみを上演する常設の興行場は、映画輸入前後の時期に存在しなかったが、映画前史との興行上の連続性が、東京以外の地域でも当てはまるのかを明らかにするうえで、見世物との関係は切り離せないものであると考えられる。

なお、本稿が対象とする日清戦争期(1894年7月-1895年4月)⁶⁾は、映画輸入以前における幻燈

会の最盛期とされている⁷⁾。清国との下関講和条約が結ばれた翌年に、キネトスコープが日本に輸入されたことから、日清戦争期は、映画前史として幻燈や見世物と初期映画との関係を捉えるうえで、きわめて重要な時期にあたると思われる。

以上のような視点から、本稿では『日出新聞』の調査にもとづき、2章で幻燈について、3章で見世物について論じ、京都の映画前史について考察していきたい。

2. 日清戦争期の京都における幻燈会

日清戦争期の京都で開催された幻燈会について、『日出新聞』の調査からまとめたのが<表1>である。まず興味深いのは、戦時下にもかかわらず、必ずしも戦争を主題としていない幻燈の上映会が開催されていることである。これは、国民国家としての統合が進み、20世紀における総力戦体制の原型となった⁸⁾、日露戦争期にはみられない現象である⁹⁾。たとえば、<表1>の7の幻燈会は、大日本写真品評会京都支部の発会式にあわせて開催され、当時京都を訪れていた「写真大尽」鹿島清兵衛が所蔵する種板が上映された。それらは「両陛下及皇太子殿下の御肖像」や「会長徳川篤敬副会長戸田氏共名譽幹事近衛篤磨京都支部会長鹿島清兵衛氏等の肖像」、「各所の神社仏閣名区勝地等」「祇園新地の芸舞妓滑稽画」などであり、日清戦争に関連するものは、記事によれば「支那人の首数十個を手に提げたる図」があったのみである¹⁰⁾。また開戦前後の時期ではあるが、<表1>の1・3では、衛生支会によって「伝染病に感ぜざる法」「学校衛生法」「病毒の伝染」「赤痢病に対する注意」¹¹⁾などについての衛生幻燈会が開催されていた¹²⁾。

ただし、基本的に日清戦争期の京都において開催された幻燈会は、日清戦争を題材としたものが大多数であった。そこで中心的な役割を演じたのが京都府教育会である。京都府教育会は1894年8月に、「日清事件に付著名の事実を蒐集し子弟の感動すべき幻燈画を取調べて各郡区に頒布する事を決議」し、「其蒐集委員に根本吉太郎、吉田五郎、増地三之助、中山熊力」らを任命して調査にあたらせ¹³⁾、その結果、「敵愾心を發揮せしむるに足るべき原画十五枚を調製し説明書を添へて二区十八郡に一組づゝ配付」¹⁴⁾することを決定した。京都府教育会による幻燈の配給をうけ、<表1>の11・12・14～32・35・36・40・41・47にみられるように、愛宕郡や山城久世郡、乙訓郡、相楽郡、北桑田郡、上京区、下京区などの各教育会が多数の幻燈会を開催している。これらの幻燈会は学校における教育のみならず、<表1>の15・16・19・20・26では、「軍人優待」にも用いられている。また京都府教育会は1894年11月にも新たな幻燈の配給をおこなうために、「選定委員根本吉太郎・増地三之助・吉田五郎の諸氏説明書を編纂」しており¹⁵⁾、こうした一連の幻燈の配給により「其器械は市内に数個あるのみにて目下各学校より引張り風の如く為り居れば新に大坂へ注文したれども目下品切のよしにて到着せず郡部各学校にても幻燈会を開くに差支へ困難し居るよし」¹⁶⁾という、上映器材の不足という事態も発生している。以上のような京都府教育会による幻燈会の積極的な開催は、十年後の日露戦争期における京都市教育会の幻燈会へも引き継がれていった。さらに1910年からは活動写真応用通俗講談会を開催し、社会教育に映画を取り入れるなど¹⁷⁾、その後の京都府教育会における教育目的での映画の導入へと結びついていったものと考えられる。

また、<表1>の4～6の京都仏教法燈会、34の大日本赤十字社京都支部、39・42の京都奉公義会（日露戦争期とは別団体）、44～46・48～51の椽村広太郎率いる報国幻燈会などが、軍恤兵部への

献金を目的として幻燈会を開催しており、京都府教育会の幻燈会とあわせて、戦意高揚や恤兵を目的とした幻燈会が多数開催されていたことが確認できる。

なお幻燈会に関する日露戦争期との差異として指摘できるのが、〈表1〉の4・13・34・39・44の祇園館、42・47の岩神座、45の伏見劇場といった芝居小屋における幻燈会の開催である。これらの芝居小屋はそれぞれ祇園、西陣、伏見の各地区における代表的な劇場であった。当時は、日露戦争期に大規模な幻燈会が多数開催された、1895年3月竣工の京都市議事堂がまだ完成していなかったこともあり、京都において大人数を収容できるこれらの劇場が、幻燈会のために利用されたものと思われる。ただし、日露戦争期において、すでに劇場は映画を上映する空間のひとつとなっており、メディアとしてのその興行価値が取って代わられていた可能性も考えうるだろう¹⁸⁾。

こうした幻燈と初期映画との連続性に関して、先に京都府教育会における、後年の社会教育への映画の導入について言及したが、もうひとつ、関連する事例を挙げたい。それは、幻燈会の説明者に「弁士」という言葉が使用されている点である¹⁹⁾。弁士は後年、無声映画の説明者を示す用語として使用されるが、そもそもは西洋から移入された演説の登壇者を指す言葉であった。そのような言葉が、映画以前の視覚文化である幻燈の説明者についても用いられていることは注目に値する。弁士という言葉が、無声映画の説明者を指す用語として定着する過程で、映画前史としての幻燈からの影響があったことが示唆されているからである。そこに、日本において無声映画のナラティブを構成するために不可欠だった、弁士という構成要素と、幻燈という映画以前のスクリーンプラクティスとの連続性を見出すことができるだろう。

3. 日清戦争期の京都における見世物興行

日清戦争期の京都で開催された見世物興行について、幻燈会と同様に、『日出新聞』の調査からまとめたのが〈表2〉である。まずはスクリーンプラクティスの観点から、錦影絵についてみていきたい。

〈表2〉の1(〈表1〉の2)では、玉川花遊一座による錦影絵と幻燈の興行がおこなわれている。内容は、「両国夕涼」「西南戦争」等を「景色の変化、人物の活動など実物を見るが如き」ものであったとされる。また〈表2〉の4の竹本八重六一座による興行も、演目は女浄瑠璃に加えて「影絵」とあり、これが錦影絵であるかどうかは不明だが、スクリーンプラクティスに関連する見世物であったものと考えられる。ともに、日清戦争との直接的な関係は、記事からはみいだせないが、下関講和条約から二年後、シネマトグラフが輸入された1897年に、大阪府内では全興行の延べ日数で849日間も錦影絵が興行されていた²⁰⁾ことを考えあわせれば、上方での錦影絵の人気は、戦争という時事物に左右されない、根強いものがあつたと推察される。

ところで、錦影絵以外にも、日清戦争期の京都においては、1895年4月1日から開会した第四回内国勸業博覧会にあわせて、多数の見世物が博覧会周囲で興行をおこなっていた。まず博覧会西側入り口、琵琶湖疎水にかかる二条橋の北西には、周囲126メートルもある〈表2〉の13の帝国パノラマ館が旅順陥落のパノラマを興行しており、同館前には模造の大砲が鎮座していた²¹⁾。また二条通をはさんで帝国パノラマ館の向かい側には日清戦争の戦場を観覧させる〈表2〉の17の覗き眼鏡小屋があり²²⁾、その南には高さ二十メートル以上三階建ての巨大な16の威海衛パノラマ館が存立していた²³⁾。さらに博覧会場から南に向かってのびる白川通の西側には、〈表2〉の11の「活人形の

名人松本喜三郎一世一代の興行」である本朝孝子伝の生人形が並び²⁴⁾、向かいの東側には外国人によって大理石像を美女に変える12の奇術がおこなわれていた²⁵⁾。そして疎水に沿ってさらに東に進めば、陶器商人平岡利助による<表2>の15の陶器を組み合わせた生人形をみることができた²⁶⁾。博覧会場の南に向かえば、丸山公園の北側に<表2>の14の日清戦争ジオラマを見物する小学生の集団²⁷⁾をみることができただろう。こうした見世物興行の活況は、内国勸業博覧会という、商品価値を選別するための「まなざしの近代的再編」の装置において、見世物が消費を促す要素として取り込まれることにより、出現した現象であった²⁸⁾。

ただし、<表2>を参照すれば、こうした見世物がこの時期、内国勸業博覧会のためのみに興行された一時的な存在でなかったことが理解されるであろう。新京極や西陣の興行街において、これらの見世物は日清戦争の時事的題材を取り入れながら、人気を博していたことが確認できる。

しかし、十年後の日露戦争期になると、これらの見世物興行は途端に姿を消していく。それでも1904年前半においては、『日出新聞』の調査から、南座の奇術(1904年2月11日～)、河村座(同年2月21日～)・夷谷座(同年4月24日～5月22日)・千本座(同年6月1日～6月10日)のパノラマ、第二福真亭のジオラマ(同年8月中旬)の存在を確認することができるが、1904年後半から1905年にかけて『日出新聞』紙上から「見世物」興行は消滅してしまうのである。そしてそのような見世物興行に代わって、映画が日露戦争期の興行街を占めていくのである²⁹⁾。

このような演目の移行という点から、本稿冒頭で述べた、東京の事例のみならず、京都の事例からも、見世物と映画との興行的な連続性を見出すことができる。実際、映画輸入以前における両者の関係は、日清戦争期の京都においても、決して無縁なものではない。

日本で最初にシネマトグラフが興行されたのは、1897年2月15日から南地演舞場において³⁰⁾であることは、広く知られているとおりである。シネマトグラフ輸入の当事者であった、京都モスリン紡績会社重役の稲畑勝太郎は、いわゆる名士のため興行界の事情に疎く、大坂千日前の興行師奥田弁次郎と、京都の絵師野村芳国に協力を仰いだことも明らかにされている³¹⁾。そしてこの奥田と野村は、ともに見世物が盛大に興行された、第四回内国勸業博覧会に関係しているのである。奥田は、博覧会場外南側中央に大きな敷地を得て、商品の出店販売をおこなっており³²⁾、会場外の見世物興行にも関与していた可能性がある。また野村は、博覧会開催直前の時期に、その近傍で開館した<表2>の2・3のパノラマ館において、パノラマ図を製作した当事者であった³³⁾。

稲畑が、奥田と野村という見世物興行の世界に関係した人物と協力して、最初のシネマトグラフ興行をおこなったことは、見世物と映画との具体的なつながりを示すものである。このような関係は、1903年に開催された第五回内国勸業博覧会において、さらに表面化される。会場外のパビリオンであった「不思議館」に、ヴァイタスコープを輸入した荒木和一が関与し、奇術やX線に加えて、映画もその一演目に加えられたのである³⁴⁾。それは、まさしく博覧会を通じた、見世物から映画への興行的な連続性が、映画輸入以後において実際に表れた事例であるといえるだろう。

4. おわりに

本稿は、映画前史としての幻燈上映と見世物興行の状況について、映画輸入以前の日清戦争期の京都を対象に、『日出新聞』の調査を通じて、映画との連続性を考察するものであった。

まず幻燈については、後年、社会教育に映画という視覚メディアを導入する京都府教育会が、日清戦争期から幻燈会の開催を積極的におこなっていたことが明らかになった。また、日清戦争期には幻燈会が、劇場でも開催されていたことが判明し、これは日露戦争期に映画にとって代わられることになったことから、両者の連続性を示していると考えられる。さらに、幻燈の説明者には、すでに弁士という用語が当てられており、無声映画の説明者と同様の名称であったことは、両者の上映空間における関連の一端を表している。

つぎに見世物についてであるが、日清戦争期の京都で開催された第四回内国勸業博覧会において、多くの見世物が興行されていた。そして、博覧会には奥田弁次郎、見世物には野村芳国という、シネマトグラフの日本最初の興行における関係者が、そこに関与していたことが明らかになった。これは、映画と見世物の興行的な連続性を示す、ひとつの事例であると考えられる。

調査分析の中心となる資料の多くが、新聞記事に限られたという制約もあり、映画と幻燈、見世物との具体的な関係は、必ずしも明快にならなかったが、少なくとも映画輸入以前から、日本における映画前史の視覚文化が、のちの映画との具体的な親和性を有していたことは、明らかにされたものと思われる。映画というメディアが、近代日本の都市においてきわめて早い時期から定着し、独特な表象を展開させていった背景には、このような映画前史との密接な関連が存在していたのである。

＜表 1＞日清戦争期京都の幻燈上映（『日出新聞』調査）

No.	上映会期間	上映場所	主催及び関係団体	上映会名
1	1894.07.02 ~ 07.03	豊園尋常小学校	衛生支会	衛生談話会〔幻燈〕
2	~ 1894.07.07 ~	坂井座	玉川花遊一座	〔錦影絵、幻燈〕
3	1894.07.26	日彰尋常小学校	衛生支会	衛生会〔幻燈〕
4	1894.07.28	祇園館	京都仏教法燈会	仏教幻燈大演説会
5	1894.07.30	共楽館	京都仏教法燈会婦人会 ※陸軍恤兵部	幻燈会
6	1894.08.01	三条大橋	京都仏教法燈会	大幻燈演説
7	1894.08.03	三条大橋北側河原	大日本写真品評会	大幻燈会
8	1894.08.11	妙満寺	資益談話会	幻燈会
9	1894.08.13	法輪寺	住職服部賢聖	恤兵勧誘幻燈会
10	1894.08.14 ~ 08.18	入楽亭	京都至誠社	幻燈音楽会
11	1894.08.17	安寧尋常小学校	京都府教育会	日清戦況幻燈会
12	1894.08.	愛宕郡上加茂村	小学校長山田宣敏	〔幻燈〕
13	1894.08.25 ~	祇園館	※恤兵部	恤兵幻燈会
14	1894.08.27 ~ 08.28	明倫尋常小学校	京都府教育会	教育幻燈会
15	1894.08.27	聚楽尋常小学校	上京区元十五組	軍人送別会〔幻燈〕
16	1894.08.28	生祥尋常小学校	下京区元五組	軍人優待式〔幻燈〕
17	1894.09.01	佐山村尋常小学校	山城久世郡教育会	日清事件幻燈会
18	1894.09.01 ~ 09.02	上加茂尋常小学校	京都府教育会	教育幻燈会
19	1894.09.02	西陣尋常小学校	上京区元四組	軍人優待会〔幻燈〕
20	1894.09.02	鷹ヶ峯村源光庵	京都府教育会	軍人送別会〔幻燈〕
21	1894.09.03	御牧村小学校	山城久世郡教育会	日清事件幻燈会
22	1894.09.04	向日町真経寺	京都府教育会	幻燈会
23	1894.09.05	柳池尋常小学校	柳池教育会	日清事件幻燈会
24	1894.09.05	檜山村尋常小学校	京都府教育会	幻燈会
25	1894.09.05 ~	乙訓郡内各所	乙訓郡教育会	幻燈会
26	1894.09.06	植柳尋常小学校	下京区元廿三組	軍人優待会〔幻燈〕
27	1894.09.07	宇治町	山城久世郡教育会	日清事件幻燈会

28	1894.09.08	植島村	山城久世郡教育会	日清事件幻燈会
29	1894.09.09	富野村	山城久世郡教育会	日清事件幻燈会
30	1894.09.09 ~ 09.10	瓶原尋常小学校	相楽郡教育会	日清事件幻燈会
31	1894.09.10	寺田村	山城久世郡教育会	日清事件幻燈会
32	1894.09.11	久津川村	山城久世郡教育会	日清事件幻燈会
33	1894.09.15	尋常師範学校講堂	尋常師範学校	幻燈会
34	1894.10.01 ~ 10.03	祇園館	大日本赤十字社京都支部	恤兵大幻燈会
35	1894.10.	北桑田郡内	北桑田郡教育会	幻燈会
36	1894.10.01 ~ 10.04	愛宕郡花脊村	京都府教育会	日清事件幻燈会
37	1894.10.06	丹波天田郡立原	予備役軍曹大島十郎	幻燈会
38	1894.11.03 ~ 11.04	伊庭村妙楽寺	中村勘三	幻燈会
39	1894.11.18 ~ 11.19	祇園館	京都奉公義会 ※陸軍恤兵部	恤兵海陸軍大勝利大幻燈会
40	1894.11.19	菊浜尋常小学校	京都府教育会	幻燈会
41	1894.11.	府立尋常中学校	京都府教育会	幻燈会
42	1894.12.01 ~ 12.03	岩神座	京都奉公義会 ※陸軍恤兵部	大幻燈会
43	1895.01.15	中村楼	京都市臨時衛生委員	衛生委員懇親会〔幻燈〕
44	1895.02.01	祇園館	医師椽村広太郎※恤兵部	第一回恤兵幻燈会
45	1895.02.09	伏見劇場	医師椽村広太郎※恤兵部	第二回恤兵幻燈会
46	1895.02.13	中竹座	医師椽村広太郎※恤兵部	恤兵幻燈会
47	1895.03.01 ~ 03.02	岩神座	桃園西陣両小学校同窓会 ※恤兵部	恤兵幻燈会
48	1895.03.02	醒泉小学校	医師椽村広太郎※恤兵部	恤兵幻燈会
49	1895.03.03	下京高等小学校	医師椽村広太郎※恤兵部	恤兵幻燈会
50	1895.03.06	新町尋常小学校	医師椽村広太郎※恤兵部	恤兵幻燈会
51	1895.03.08	永松尋常小学校	医師椽村広太郎※恤兵部	恤兵幻燈会

〔注〕 無印は上映会を主催した団体、※印は寄付を受けた団体を示す。また〔〕内は上映会で使用されたメディアについての補足。

＜表2＞日清戦争期京都の錦影絵・見世物（『日出新聞』調査）

No.	興行年月日	興行場所	興行者・製作者	「見世物」名
1	～ 1894.07.07 ～	坂井座	玉川花遊一座	錦影絵、幻燈
2	1894.10.01 ~ 11.	パノラマ館	野村芳国	パノラマ（日清戦争牙山・豊島・平壤・海洋島）
3	1895.01.01 ~	帝国パノラマ館	野村芳国・田村宗立	パノラマ（旅順口激戦）
4	1895.01.01 ~	徳来軒席	竹本八重六一座	女浄瑠璃、影絵
5	1895.01.01 ~	吉村席	山本亀松	生人形（日清戦争）
6	1895.02.01 ~	花村席	不明	生人形（地獄極楽）
7	1895.02.01 ~	パノラマ館	不明	パノラマ（日清事件金州戦争）
8	1895.02.01 ~	角の家	不明	生人形（日清事件）
9	1895.03.01 ~	河村座	不明	生人形（福島中佐単騎旅行）
10	1895.03.01 ~	京極席	不明	ジオラマ（日清戦争）
11	1895.04.01 ~	白川橋西	松本喜三郎	生人形（本朝二十六孝子伝）
12	1895.04.01 ~	白川橋東	ムーリシュ・バレース	奇術
13	1895.04.01 ~	帝国パノラマ館	不明	パノラマ（旅順陥落）
14	1895.04.01 ~	丸山公園枝垂桜前	高橋勝蔵	ジオラマ
15	1895.04.01 ~	疎水沿岸	陶器商平岡利助	陶器生人形（日清戦争）
16	1895.04.11 ~	威海衛パノラマ館	田村宗立	パノラマ（威海衛）
17	1895.04.	威海衛パノラマ館北隣	不明	覗き眼鏡
18	1895.05.01 ~	角の家	不明	猿男の曲芸
19	1895.05.01 ~	花村席	若松斎鶴堂一座	美術鑑細工

〔注〕（）内は演目についての補足。

注

- 1) たとえば、小松弘「日本におけるスクリーン・プラクティス」『シネマの世紀 映画生誕 100 年博覧会』川崎市市民ミュージアム、1995 年、14 頁、ローランド・ドメーニグ (確井みちこ・大傍正規訳) 「『映画の誕生』再考—映画の起源に関する見解と日本のスクリーン・プラクティス」『日本映画は生きている 第二巻 映画史を読み直す』岩波書店、2010 年、35 頁。なお、小松やドメーニグの依拠する、チャールズ・マッサーが主張するスクリーンプラクティスの概念には、幻燈のほか、カメラオブスキュラやファンタスマゴリー、ステレオプティコンなどのメディアから、イラストレイテッドレクチャーのような文化、エドワード・マイブリッジの視覚装置なども含まれている (Charles Musser, *The Emergence of Cinema*, Berkeley: University of California Press, 1990, pp. 15-54)。ちなみに、初期映画が映画史研究において焦点化された当初から、その映画スタイルと幻燈との関係は議論の対象となっていた (Tom Gunning, "The Non-continuous Style of Early Film 1900-1906," in Roger Holman ed. *Cinema 1900-1906: An Analytical Study*, Brussels: Fédération Internationale des Archives du Film, p. 221)。ただし、このような初期映画と映画前史の連続性を強調することは、日本映画史の起源を前近代に拡張させ、その長大さを過大評価する危険性もはらんでいる。第二次世界大戦中に進展した、そうした視座の政治性の問題は、板倉史明「吉山旭光『日本映画史年表』(映画報国社、一九四〇) 解説」(牧野守監修『日本映画論言説大系 第三期 活動写真の草創期 29』ゆまに書房、2006 年)を参照のこと。
- 2) たとえば、大久保遼「明治期の幻燈会における知覚統御の技法—教育幻燈会と日清戦争幻燈会の空間と観客—」『映像学』83 号、2009 年 11 月。なお、スクリーンプラクティスとは異なる視座であるが、幻燈と近代教育に関する研究も、近年発表されており、たとえば前川修「美術史の目と機械の眼—スライド試論」(岩城見一編『シリーズ・近代日本の知 第 4 巻 芸術／葛藤の現場—近代日本芸術思想のコンテクスト—』晃洋書房、2002 年)は、美術史というディシプリンの形成過程と、近代的視覚に関する興味深い議論を提示している。
- 3) 写し絵については、岩本憲児『幻燈の世紀 映画前夜の視覚文化史』(森話社、2002 年)、鶴淵幻燈店については、田中純一郎『日本映画発達史 I』(中央公論社、1975 年、156-159 頁)、丸川商店については、入江良郎「日本映画史と吉沢商店」(牧野守監修『日本映画論言説大系 第三期 活動写真の草創期 22』ゆまに書房、2006 年)、中川望「丸川商店」(『映画学』22 号、2008 年)を参照のこと。なお丸川商店は、日清戦争期の『日出新聞』にも広告を掲載させており (図 1)、当時、関西にも進出していたことが確認できる。



(図 1) 『日出新聞』 1894 年 9 月 16 日

- 4) 吉山旭光「日本映画史素稿 2 映画の前身 明治時代の写し絵」『キネマ旬報』552 号、1935 年 9 月 11 日、65 頁
- 5) 上田学『日本映画草創期の興行と観客 東京と京都の事例から』早稲田大学出版部、2012 年、59 頁
- 6) 日清戦争は、清国との下関講和条約後も、11 月まで台湾征服戦争が継続しており、この期間が参謀本部編『明治廿七八年日清戦史』で採用されているが (原田敬一『シリーズ日本近現代史 3 日清・日露戦争』

岩波書店、2007年、86-87頁）、ここでは日本と清国が交戦した期間にあたる狭義の日清戦争期を採用する。

- 7) 岩本前掲書、165頁
- 8) 山室信一『日露戦争の世紀—連鎖視点から見る日本と世界—』岩波書店、2005年、112頁
- 9) 日露戦争期の京都における幻燈会については、上田学「近代日本における視覚メディアの転換期に関する一考察—日露戦争期京都の諸団体による幻燈及び活動写真の上映活動を中心に」(『アート・リサーチ』4号、2004年)を参照のこと。
- 10) 「写真会の幻燈会」『日出新聞』1894年8月5日
- 11) 「衛生幻燈会」『日出新聞』1894年6月12日
- 12) これら衛生幻燈会の開催は京都府の方針でもあった。1894年8月には京都府の三橋警察部長が「府下の各郡長に対し赤痢病の予防等に付ては自今成るべく人民に通俗的衛生幻燈を示して之れが予防を注意するの必要あるべきを以て医会衛生会等と気脈を通じて時々衛生幻燈会を開く様したしとの照会」をおこなっている(「衛生幻燈会」『日出新聞』1894年8月18日)。
- 13) 「幻燈画の調査」『日出新聞』1894年8月15日
- 14) 「教育会の幻燈」『日出新聞』1894年8月17日
- 15) 「京都府教育会の幻燈」『日出新聞』1894年11月22日
- 16) 「幻燈器械の払底」『日出新聞』1894年9月15日
- 17) 岡本清逕編『京都府教育会沿革』京都府教育会、1920年、122-123頁
- 18) なお、日露戦争期に多数開催されていた、民間慈善団体による活動資金獲得のための幻燈会が、日清戦争期の『日出新聞』では確認することができなかったことも、両時期の差異として指摘できる。ただし、代表的な慈善団体である、岡山孤児院が幻燈会の巡回を開始したのが1897年である(菊池義昭「岡山孤児院の音楽幻燈(活動写真)隊の活動と養護実践のかかわり—研究の目的と全体的動向を中心に—」『共栄児童福祉研究』4号、1997年、70頁)ことから、これらの団体はこの時期にはいまだ幻燈会の巡回をおこなっていなかった可能性が高いと考えられる。
- 19) たとえば、「弁士は江村秀山・英普・小原正印其他同会員等」との記述がみられる(「仏教法燈会」『日出新聞』1894年7月31日)
- 20) 上田前掲書、68頁
- 21) 「帝国大パノラマ館」『日出新聞』1895年4月9日号。なお同紙には、外観のスケッチも掲載されている(図2)。なおパノラマについて、同時代には見世物と異なるという言葉も存在したが、木下直之が指摘するように、そのような言説こそが、当時の見世物としてのパノラマの位置づけを示していたと考えられる(木下直之『美術という見世物』平凡社、1993年、226-229頁)



(図2) 『日出新聞』1895年4月25日

- 22) 「日清戦争眼鏡」『日出新聞』1895年4月16日
- 23) 広告「威海衛パノラマ館」『日出新聞』1895年4月11日
- 24) 「生人形の工事」『日出新聞』1895年1月18日
- 25) 「活石像及び空中運動」『日出新聞』1895年4月11日
- 26) 「会場附近の夜景」『日出新聞』1895年4月7日
- 27) この興行では小学校が集団で申込みば入場料が半額の一銭となった（「征清デラマの割引」『日出新聞』1895年4月14日）。
- 28) 吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論社、1992年、146-152頁
- 29) 『日出新聞』の調査によれば、京都での映画興行は、日露開戦前の1903年が年間7回であるのに対し、日露が開戦した1904年は年間24回もの興行が開催されている。
- 30) 田中前掲書、39頁
- 31) 高梨光司編『稲畑勝太郎君伝』稲畑勝太郎翁喜寿記念伝記編纂会、1938年、301頁、塚田嘉信『日本映画史の研究—活動写真渡来前後の事情—』現代書館、1980年、96-97頁。野村芳国は、「都おどり」の背景画を書くなど劇場の絵師として活躍し、一時は新京極の歌舞伎座も経営するなど、興行も手掛けていた。絵師としての野村芳国については、岡本祐美「野村芳国伝」（『麻布美術館研究紀要』1号、1986年）も参照のこと。
- 32) 「第四回内国勸業博覧会場略図」『日出新聞』1895年4月1日。なお、稲畑勝太郎自身も、審査官として勸業博覧会に参画していた（高梨前掲書、307頁）。
- 33) 京都における近代的視覚という観点からの、博覧会と稲畑、野村の密接な関係は、富田美香「古都から映画都市創生のトポロジー —作る人、見る人、かける人の相関—」（『日本映画は生きている 第3巻 観る人、作る人、掛ける人』岩波書店、2010年、126-129頁）も参照のこと。
- 34) 宇田川文海述『電気光学不思議館の案内』不思議館、発行年不明。

付記 本稿の引用文は、旧字体から通行字体にあらためた。

（日本学術振興会特別研究員）